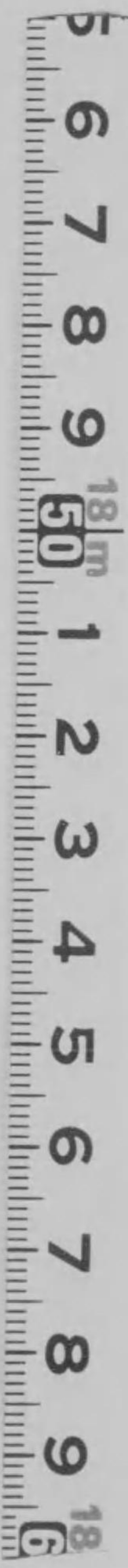


393

247

実生活を
主としたる
大帥教の
特徴



始



高野山 松永有見序
大學教授

中僧都 高橋有健著

實生活を
主としたる

大師教の特徴

東京 國譯密教刊行會發行

393-247

高野山
大學教授
松永有見序

中僧都
高橋有健著

實生活を
主としたる

大師教の特徴

大正
10. 9. 30
内交

東京
國譯密教刊行會發行

序 文

眞言宗は、眞實なる言葉に因りて、眞實なる生活を、此の世に將來す宗教である。然らば眞實なる言葉とは何ぞ。

高祖大師は曰く、「妄語は日夜に苦を受け、眞言は苦を抜き樂を興ふ」と云ひ、

大日經には、「一切衆生の身心は常に是れ大日如來の具體法身なり」と。

如是言葉を眞言と云ふのである。

彼の現世は、夢の如く幻の如くして、一も眞實あることなしとし、遠く十萬億土の彼岸に淨土を仰望するが如きは、方便の教であつ

て眞實の教でない。

今眞言宗の教は、自心の内に佛を見、淨土を求めて此の世をして直ちに光明に充ちたる莊嚴なる佛國土と成さんとする宗教である。然れども退て考ふるに、自心の内に佛あり惡魔ありて、何れを眞實の自己と爲すべきか。人々は皆此の二心に迷ふて居るのである。若し佛心を以て自心となすものは、大智大悲の心を以て、常に世間を淨化し、衆生を救済して利他の大願を行じて佛國土を莊嚴するのであるが、之れに反して魔心を以て自心とするものは、自己の利益を而已觀て、他人の幸福を願はず、世を溷濁に導くものである。吾人は佛祖の眞言を奉じて、佛心を以て自己の眞實の心とし、之れ

に依りて自己の眞生活を爲すと同時に、最も眞實にして完全なる社會を、此の世に建設せなければならぬ。之れ高祖弘法大師の大願にして亦眞言宗の眼目とする處である。

大正十年初秋

高野山大學にて

松 永 有 見

自序

世の中が文明になるにつれて、昔の如く平和な生活が出来なくなつて来た、殊に都會に於て生活の不安底や、其他の不如意の事情から迷信が盛んである。私が都會生活に依つて尤も深く感じた事は、都會の人達が一般的に迷信に富んで居つて、常に心に安心がない事である、この人心の迷信不安に乗じて、邪教が流行して、宗教の美名の本に、人心を迷亂せしめて居る。本書は一にこれ等の人々が、正しき信仰によりて安心を得られんが爲に、通俗的に弘

法大師の教を説くのが目的である。この小本によつて例へ一人たりとも大師の教を信じ、正しき信仰に入ることを得ば幸で、且つこの書の目的は達せられたのである。茲に『實生活を主としたる大師教の特徴』と題したが、恐らく摩尼の寶教も全く瓦礫の教となつた様な感がある、乞ふ之を諒せられよ。本書は通俗的に眞言宗の大意を述べたものであるから、猶深く大師の教を知らんとするものは、名師に付いて問へ、然らば眞言秘密の寶藏は開かれて萬寶は直に實現せられん已、敢て序となす。

大正十年秋

著者誌

實生活を主としたる 大師教の特徴

目次

一 信仰の意義.....	一
二 弘法大師の教.....	四
三 眞言宗は秘密教である.....	六
四 釋迦と大日.....	八
五 兩界曼荼羅.....	二一
六 本尊と利益.....	二三
七 阿彌陀佛.....	二七
八 本體と現象.....	二九
九 因果の道理.....	三三
十 迷の根本.....	三五
十一 三種の菩提心.....	三七

十二 不二の法門……………一九

十三 理論と實行……………三三

十四 悟の修行……………三四

十五 念珠と合掌……………三六

十六 塔婆の意義……………四〇

十七 供養の意義……………四三

十八 眞言と念佛……………四四

十九 往生と成佛……………四九

二十 淨土と極樂……………五一

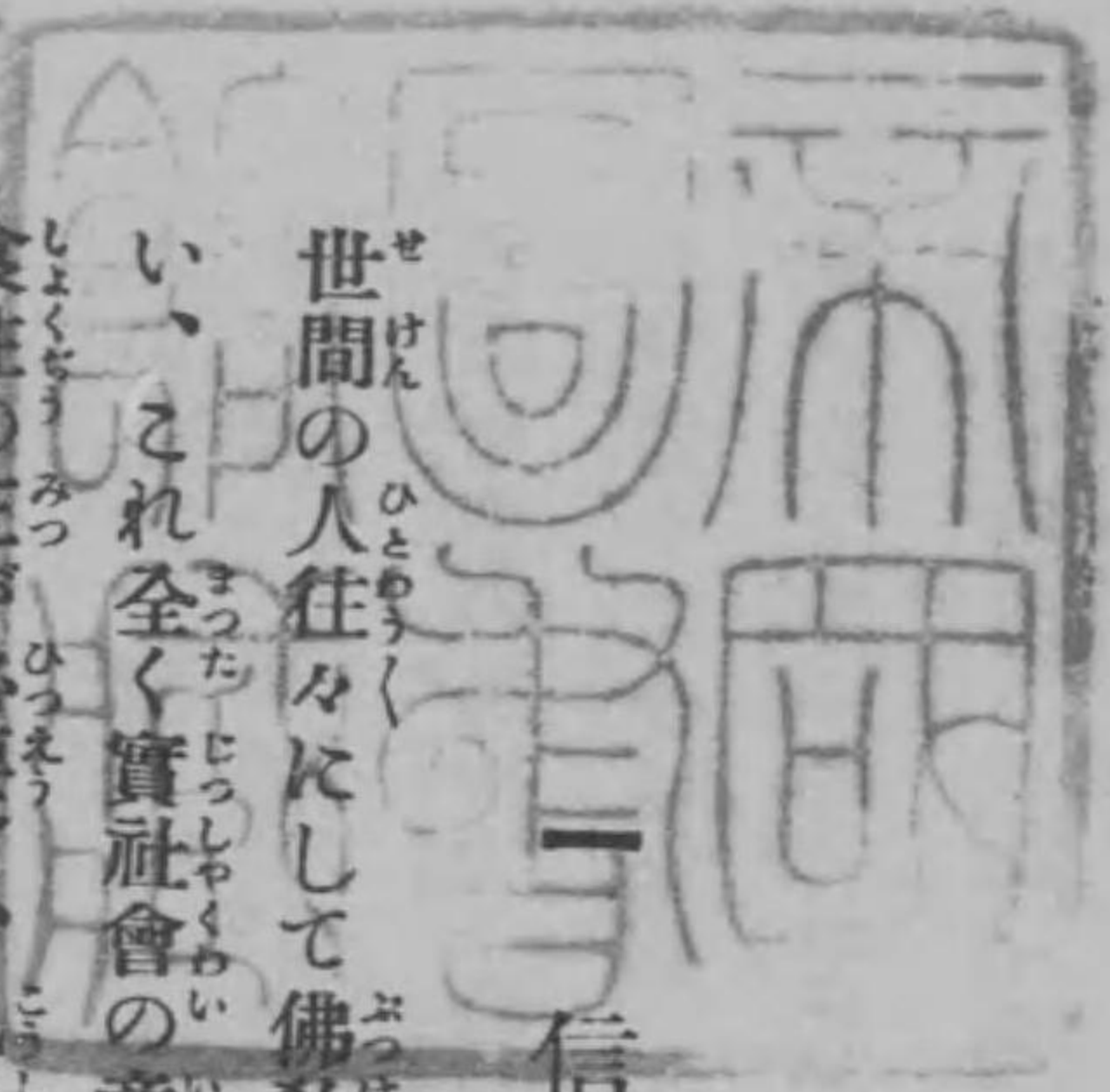
廿一 心佛衆生……………五四

廿二 智情意と佛教……………五七

實生活を大師教の特徴 目次終

實生活を
主としたる
大師教の
特徴

高橋有健著



信仰の意義

世間の人往々にして佛教の信仰を以て、實生活に何の價値もないと考へて居る人が多
い、これ全く實社會の意義を知らないものである。彼等は思ふであらう、生活には衣
食住の三が必要で、孔子も『衣食足つて禮節を知る』と申して居る、されば生活には、
衣食住の必要缺くべからざる事は勿論であるが、如何に物質的に満足を得ても、心的
不安がある、唯物あるを知つて、心の價値を知らないものに對して云ふのであつて、
決して衣食住の三を否定するものでない。眞言宗はむしろ物質に重きを置くのである

信仰の意義

佛とはこの物と心とに完全を得て居るものである故に、即事而真も即俗而真も即身成佛も、これから現はれて居るのである。即ち吾々は物の外に心の存在を忘れてはならん、今信仰とは即ち信心である、信とは誠の心であるが、佛に對しての誠の心であるこれは佛敎に入るの初めてあつて、然も終極である、信は始終一貫せる心である、吾々の生活を意義あらしめるものは信仰の力である、この信仰を得るには、法を聞き佛を禮拜して、佛の偉大なる靈感にふれる事である、即ち佛の加持力を被る事である、この如來の加持力を被れば、自己に對して自信を得るのである、これを重ねるによつて、益々信心は堅固になつて、如何なる困難があつても、貫かねば止まないものである、親が子の爲には苦を苦とせず、かへつて樂しみとなる如く、信仰生活によつて安樂に生活し得らるゝのである、同行二人の生活となるのである、この信仰なるものは、自己の不安から起つたのであるが、信仰を得たら不安はなくなるから、安心と云はれるのである、信心は社會生活に於ける衣食住の如く、心の安住處である、安心とは心

に一の安底を得る事である、心はコロコロと云ふて、玉の如く動いて居るが、安心を得たら、如何なる事があつても動かない。安心と云ふも、信仰の徳を云ふたものであつて、唯心が安定して居るのみでは、信仰の價値はないのであるが、この安心を得た處から、無限の活動があらはれて來るのである。故に安心を得たならば、一面には感謝の生活として、他面には努力の生活となるのである、世間の人々が信仰に價値を認めないのは、唯この安心の一方を以て、信仰の全體と心得て居るからである、眞の信仰安心には、自利々他の功德があらはれて來るのである、其の功德は、即ち三種の菩提心と云ふ事である。されば如何なる人も、宗敎に入るには信が第一である、故に經に「信を以て能入となす」と説いて居る。佛敎の道理を信せない人は、佛の慈悲を感じずる事の出來ない人である。然して佛敎の道理因果を信する人は、佛の慈悲に救はれる人々であつて、實に幸福なる人々と云はねばならぬ、實に信仰心こそ、人生の目的を達する第一歩であつて、而も人生の終極である。

二 弘法大師の教

弘法大師の教は、他宗に説かない教であるから、秘密教と示されて居る。眞言宗は萬物すべてが教の體とするから、實に廣い教である。故に貴賤貧富の區別なく、智者愚者の差別もなく、皆來つて教へに入る事が出来る。禪宗の如きは、以心傳心を宗とするから、普通の愚者は、教を受けるに困難である、又淨土宗の如きは、事物を本とし愚者を主として説かれた教であるから、智者は入るにたへない。かくの如く智者や愚者を主として、説かれたのが眞の佛の精神であらうか、佛教の眞の意義であらうか。茲に於て大師は、智愚の差別なく、萬人に通じた教が、佛の教であると信ぜられて、これ等を統一して、全體としての教を弘められたのが密教である。故に大師は十住心論を著して、他宗は眞言門に入る方便としてある。眞の佛の悟りに入るには、眞言の外にないのである。何故なれば眞言宗の中には、天臺・日蓮・禪宗・淨土等の教が

あるのである、眞言とは佛教全體に通じた教であつて、他宗は眞言の一部を開いた教である、これは眞言に十三佛を祭る中に、他宗の佛が含まれて居るによつても知ることが出来る。大師は世界のすべてが、佛であると示されて居るのであるから、佛とは唯彌陀、觀音、地藏の一佛に限つた事はない、然るに他宗では、一佛を以て他に佛はないとする教もある。かくの如き一佛では、萬人各別なる人を救ふ事が出来ない、故にこれ等の人に應じて現はれたのが、多くの佛であり菩薩であるが、この本體は大日如來の一佛とするから、一佛にして多佛とする處に、眞言宗の特色があるのである。唯一佛に限つては、萬人の希望を救ふ事が出来ないのである、否佛の衆生救濟の本意に契はないのである。例へば一家に於て臺所、玄關、座敷、居間等のあるのは、他宗にして家全體は眞言宗であるから、他宗は一部であり半であり淺である、眞言は全體であり満であり深である事も知らるゝてあらう。されば眞言宗こそ眞の佛の本意である教である。然し他宗は眞言の一部であり、半であり淺であるから、と云ふて排斥し

てはならぬ、浅があればこそ、深い密教も価値を高めるものである、中學生や大學生が、小學生は智が浅いとて排斥してはならぬ、自己も初めは小學生であつたのである故に他宗を排斥する事は、かへつて自分を傷ける事になるのである。故に大師は他宗も真言の中に入れた、廣い佛教を弘められたのである、故に何宗の人も、來つて入るをさまたげない教である、大師は澤山あれども、大師と云へば一に弘法大師を示す如く、宗旨は澤山あつても、真言の中に統一せられるのである。これ弘法大師の教が、他にない教であつて、密教と云はれる特色であります。

三 真言宗は秘密教である

弘法大師は真言秘密宗の開僧である、大師は釋迦の説かれた教は、病人に對して藥を與へる如く、人々に應じて説かれたのだから、浅い故に顯教とし、大日如來の教は、大日自身が法樂の爲に説かれたので、深いから密教と名けると示されて居る。されば

秘密とは隠れて居つて、深いと云ふ事であると云ふと、世間の人は、如何なる不思議の事をするのかと、疑問が起つて來る。そこで大師の秘密の意味には、二つある。一には衆生秘密であつて、真言宗の教は、この凡夫の身體が、直に佛であるとするので過去前世の業によつて、此の世に生れ來た此肉體を指した佛であつて、我が身の外に佛はないとするのであるが、然し我々は本來佛であるにもかゝらず、佛の功德をかくして凡夫と迷ふて來たのは、自分が自ら隠したのであるから、衆生秘密と云ふのである、例へば盲人は日光が照つて居つても見えず、又聾人が大音がして居つても、聞えない様なものである、故に世間に普通云ふ秘密とは、意味が異なつて居る事を知らねばならぬ、二に如來秘密である。真言の法門は、他の宗旨では説かない教であるから、實に深い、故に拙ない人や、下等の人や、秘密を聞いても解する事の出来ないものは、この秘密の道理を信ずる事が出來ない、故に其の受ける人に非ざれば、授けてかへつて罪を作る事がある。例へば子供に銘刀を與へて、害をなすが如くである。これ

真言宗は秘密教である

は銘刀を惜むにあらざして、其運用を知らないから授けない、これを如來秘密と云ふのである。

故に眞言宗は、大日如來の秘密教である事を知らねばならぬ。これを要するに、秘密とは大日如來の眞實の教である。凡夫はこの眞實の教を、聞く力がないから秘密と云ふたのであつて、若し人がこの教を聞く力があれば、大日如來は何時でも説法せられるのである、否むしろ各人の心の藏を開いたならば、秘密の教は現はれるのである。故に眞言宗は各人個有の佛徳を發見して、秘密教と云ふのである。

四 釋迦と大日

眞言宗には釋迦と大日とを二方面から見るのである、教相判釋からは、釋迦と大日とは全く別佛とするが、實體論からは、釋迦即ち大日とするのである。

先づ教相門から云ふと、釋迦は印度の國に生れて、修行の結果、遂に菩提樹の下で悟

を開かれたので、今より三千年前に起つた教である、然るに密教は大日如來の教であつて、大日如來とは、世界到る處に現はれて説法して居るのであるから、三千年や五千年ではなくして、世界と同時に大日如來はあるのであるが、これを聞くべき人がなかつたが、釋迦滅後八百年に、龍樹菩薩が南天の鐵培を開いて、金剛薩埵に面會し、大日如來の法を傳へられたのであるから、釋迦の教とは全く異なる教であつて、秘密眞言教である。故に釋迦と大日とは全く別な佛であるとするのであるがこの二佛は根本的に別體かと云ふにそうでない、この二佛は同佛であるとするは實體論である。即ち實體論とは實質に就いて云ふので、眞言宗は吾々凡夫てさへ、大日と同體であると云ふのであるから、釋迦が大日と同體でないとは云へない、大日如來は自證であつて、釋迦は化他である、即ち大日如來が衆生救濟の爲に、釋迦と現はれたのである、故に釋迦は多く顯教を説かれたが、又密機の前では密教を説かれたのである、この密教を説かれた邊からは、大日と同體である、本體は大日如來から現はれた、故に實體

は大日に外ならぬ、故に二佛は全く同一佛である、故に眞言宗には、釋迦と大日とは右の如く二通りに見るのである。釋迦大日同様の佛と見るは、實體の上で云ふのであるが、これは同一人の上にて説明せらるゝのである、例へば大臣がありとする、大臣が子供の時に説かれたのが浅いから、顯教として釋迦の教であるが、大臣になられての説は深いから、密教とて大日の教とするが如きである、釋迦の教にもこの淺深の教がある、故に淺からは釋迦は生身の佛とするが、密教には釋迦を法身大日として、一體を論ずるものである、故にこの邊から云へば、同一人の説法でも、聞く人によりて異なる、人々によつて同一の事は、解釋が各別となるのである、この同一説法を色々に解釋する處から、各宗は起つたのである、故に教の差ではなくして、機根の差であると思はれる、故に大師は「醫王の目には、途にふれて皆藥なり、實を解する人は石の中に寶あるを知る」と示されて居る。大師が釋迦は大日と一體と見る所以は、茲にあるのである。而してこの釋迦の教は、密教を説くも顯教の中へ雜へて説かれたから、雜

部の密教と云ひ、大日如來の説かれた教は、只密教のみを説かれたから、これは純部の密教と云ふのである。この純部の密教は、眞言宗の根本であつて、雜部の密教は、大日の教の一部を説くものとして用ゆるのである。天台宗に密教と云ふは、この雜部の密教にして、純部の密教でない、故に台密と云ふて、眞言密教と區別するのである故に密教には二通あつて、純部密教は眞言宗の特色である事を、心得て置かねばならぬ。

五 兩部曼荼羅

眞言宗は一面から、曼荼羅宗とも云ふのである、曼荼羅とは、一切の義理が含んで居ると云ふ事である、宇宙は無限であるが、これを統一して理智の二として、理を胎藏界とし、智を金剛界とする、故に萬物は兩界の中に接せられて居る。胎藏法とは理の徳であるが、萬物の平等である事を示すもので、世界の差別の相も、

この理平等から現はれたものである、即ち自然界の差別相の、當相其ま、平等性のものであるとするのであるから、物質的の方面である、これを蓮華に例へて見れば、蓮華は泥水の中に生ずれども、花は清浄である如く、吾々凡夫は迷の世界に居れども、本性の身體は佛徳を現はす力を持つて居るものであるとするので、萬物に佛の徳が備つて居ると云ふ事を示したものである。

金剛界とは、智の徳を云ふのであるから、差別を現はすものである、吾々が修行によつて得た處の五智の佛徳であつて、眞如と心とが一致した處、即ち果徳である。これを要するに、理と智、物と心、吾と佛、平等と差別、因と果、現象と實在、波と水の如く一應區別せられる、然しこの理智とか、物心とかは説明の上であつて、本來は理を離れて智なく、又智を離れて理なきが故に、二者は全く別物ではない。只一の物を外面からと、内面からと見た迄であつて、理を主とするか、智を主とするかの區別に過ぎない、金胎の中に一切世界の萬物を含めて説明したものが、曼荼羅である。

而してこの兩部曼荼羅の中心の佛は、大日如來である、故に理として衆生を示し、智として佛を説きしものにして、大日如來の徳を二方面から見たのであるから、吾々凡夫も、大日の因徳であるから、吾々直に大日如來である、即身成佛の教も、本源はこの曼荼羅にあるのである。これを要するに、他宗の教では、人間を罪人扱にするのである、然るに眞言密教では、吾々を直に佛とするのである、これが秘密の秘密たる特色である事を心得てもらはなければならぬ、密教によつて人間の價値が、高くなつたのであるから、皆様も自ら佛である事を自覺して、向上發展してもらはなければなりません。

六 本尊と利益

已に兩部曼荼羅の處で述べた如く、理智の二方面であつて、中心は大日如來である、故に眞言宗の本尊は、大日如來の外にないのである、然るに眞言宗の各寺院の本尊は

不統一て地藏を本尊とし、或は觀音或は不動或は藥師或は彌陀と云ふ風に、皆本尊を異にして居る、かくの如きは何故かと云ふに、元來大日如來は、智慧の德及慈悲の德又は福德を成就せる佛である。これ等の德を現はさんが爲に、種々なる佛となるのである、智門の佛として文珠普賢と現はれ、又悲門の佛として、彌陀觀音地藏と現はれ、又福門の佛として多門天聖天と現はれたので、其他又藥師として病氣を利益するのである。かくの如くして大日は化他の爲に、無量の佛となつて、現はれたのであつて、これ等の佛を一門の佛とし、大日をば普門の佛とするのである。故にこれは本末の不同にして、實體から云へば、大日に歸するのであるから、別であつて同じ故に有縁の佛に歸依する事は、直に大日に歸命する事になるのであるから、何れの佛を信ずるもよいのであるが、正しく眞言の本尊は、大日如來である事を知らねばならぬ。眞言宗に大日如來が、かくの如く無量の佛と現はれるのは何故かと云ふと、一には佛の德を示す爲であつて、已に述べし通りであるが、他には衆生を利益する爲である。

思ふに人の病に澤山の種類があるから、藥を施すも一樣に行かぬ如く、衆生の希望も多いから、これに隨つて佛の數もあるのであるから、無量の佛となるのであるが、これを大別すると、上の智門と悲門と福門との三となるのである、かくの如く大日如來は化他の爲に身を種々に現はして、吾身を救ひ下されるのである。淨土宗の如く、一佛に限つた佛ではありませぬ。例へば他宗の佛は、竹の如く一佛で貫ぬひて居るが、眞言宗の佛は木の如く枝を四方に分つた教であります、故に利益も各人に應じて現はれるのであるから、利益の方から見ても、澤山の佛の存在は、利益が多い事が知られるであらう。かくの如き意味に於て、眞言宗には大日如來を本尊として居るが、衆生の方面から無量の佛を現じて利益せらるゝから、これ又本尊とせらるゝのである。故に自證門からは、大日一佛を本尊とするのであるが、化他門から諸佛を本尊とするのである。本尊とは經に最尊最勝なるが故に本尊と云ふと示して居るから、正しくは大日如來であるが、化他の人に付くと、自己が利益を蒙りし佛こそ、最尊最勝であつて、

何も利益を受けない佛は本尊と云ふ義がなからう、これ諸佛も本尊となり得るのである、この意味に於て、眞言宗は諸佛皆本尊の義を説くのである、弘法大師は入壇灌頂と云ふて、眞言宗で尤も有難い法に入られた時に、大日と一體になられた、故に遍照金剛と云ふ、遍照とは即ち大日如來である。故に大日と一體の本尊とし、又開僧として本尊とするのである。

因に兩部神道の説から云ふも、大日如來は除暗遍明の義と云ふから、天照皇大神と同じ義であると主張して、神佛一致を示したものである。眞言の意味から云へば、神佛は一體であるから、これ又本尊の義があるのである。かくの如くして本尊は一大日であつて、然も多佛を本尊とする義は、他宗にはないこれ眞言宗の特色である。

利益も解釋の仕様で二通になる、佛の方から云へば、一、降伏門の佛として、忿怒の相をした不動尊や、降三世愛染明王と現はれるのである、二に慈悲門の佛として、地藏や觀音や彌陀と現はれるのである。又この利益を、衆生の方から云へば、降伏門の

佛によりて、吾々の煩惱を斷ずるのである。例へば惡人の爲に巡查がある如く、彼等の惡心を止めるのである。慈悲門の佛によつて、吾々の善心は益々増上し發達するのである。例へば善なる行に對して、賞を與へるが如きものである。かくの如くして佛は利益を施し、衆生は利益を蒙るのである。これを加持感應の力と云ふのである。これを要するに、眞言宗の本尊は大日如來であるが、利益の方から諸佛を本尊とするのである。

七 阿彌陀佛

阿彌陀如來と云へば、直に淨土宗や眞宗の特有の如く考へる人が多いが、決してそうではない。眞言宗にも彌陀佛を説くのである、然し眞言宗の彌陀は、他宗の彌陀と形相も意義も異なつて居るのである。

先づ淨土宗等の他宗の彌陀は、報身佛とするので、これは大經に法藏比丘が、過去に

發願修行の大願 大行によつて悟られた佛にして、六字の名號を成就せる彌陀如來である。然るに眞言宗に云ふ彌陀佛は、大日如來の一徳たる慈悲を表したものであるから、法身佛とするのである、法身とは本來法然として佛である、衆生を救ふ爲に大日より現はれた佛とする。然し本誓願を成就せる佛であるから、別體の佛ともなるのである、又同體の佛ともなるのである。阿彌陀と云ふ事は、無量壽とか無量光或は甘露王と云ふ義であつて、壽命光明等に於て自在を得て居る佛である。故にこの佛を信仰したら、これ等の功德が得られるのである。

先づ他宗の彌陀佛の形相を云ふと立相であつて、背の後に圓光があつて、五色の光明を放て居る、右手は上に述べて、説法の印を結び、左手は下に垂れて同じく説法の印を結んで居る、この手を上下にせるは、上菩提心を求め、下衆生を救ふ事を示して居るものである、又立つて居るは、慈悲心を現して居るものとするので、大悲心の外に彌陀はないのである。然らば眞言宗の彌陀は如何と云ふに、座禪に住して右上左下

にして、彌陀の定印を結んで居るのである、右上は佛にして果とし、左下は衆生にして因である、この兩手を合して居る處に、衆生と佛と一體の義があるのである、吾の外に彌陀佛はないのである。かくの如く深い義がある。これ眞言宗の特色である。これによつて他宗は彌陀と凡夫と區別して居るから、佛の形相も上下の差別を示して居る、眞言宗は彌陀と凡夫は決して差別はないとするから、佛の形も自ら異なつて居り、又意義も非常に異つて居る事を知らねばなりません。

八 本體と現象

佛教は宇宙を説明するに、本體と現象とに分けて論ずるのである、これに二通りの方法がある、一は實相論で、他は緣起論である。

先づ實相論を云ふと、吾々の世界の差別なるは何か、この差別の本源がなければならぬ、この本源は眞如である、然らば眞如とは如何なるものかと云ふに、眞如は平等と

差別の二方面を以て居るものであるが、この實相論は宇宙の實體を論ずるものであるから、平等の方面を説くものである、例へば波によりて水あるを知るものである。二に縁起論は、眞如は平等であるが、この平等の體に又差別の相を具して居るので、この差別は現はれて現象となれるものである、眞如があらはれて萬法となつたので、この現象あるによつて本體あるを知り、又本體あるによりて差別あるを知るのである。故に水によつて波あるを知るのである。

これを要するに、實相論は水其物を説かんとし、縁起論は波を明かさんとするものであるが、歸する處は一となるものにして、一物を二方面から論じた差である、水と波との如き區別であつて、水は波となり波は又水に歸するもので、水と波とは動靜の差別であつて、本質は水即ち波、々即ち水である。かくの如く二方面は一になつたのである、故に本體と現象とは表裏のものにして別物ではない、故に吾々の本體は大日如来であるとするのである。水は平等であるから佛であり淨土である、又波は差別であ

るから衆生であり娑婆である、これは眞如の上の二作用であるが、本體に歸すべきものである、故に吾々は現象の上に囚はれて苦しんで居るが、一步轉じて本體に歸らねばならぬ。然して眞言宗には六大縁起を主張するものである、六大とは地水火風空識であつて、これ吾々の見て居る土地や水や火等を云ふものであるが、地や水や火の裏面には、眞如の本體が存立して居るのであるから、眞如の本體もこの現象界の地水火等の六大の外にないのである、これ現象によりて本體を説くものであるから縁起論である。大師は現象界の差別して居る處に、平等の本體が存立する事を説かれたのが、秘密宗と云はれる理由である、故に大師は現象を本として、眞言宗を開かれたので、即身成佛義の中に「夫れ佛法遙かに非ず身中にして即ち近し身を捨て、何處にか佛を求められるか」と示されて居る故に眞言宗の教は六大縁起を本として弘められた宗旨である、されば六大縁起論こそ眞言宗の根本の教儀である、故に宇宙萬有の本體は六大である。

九 因果の道理

佛教を信ずる人は、因果の道理を深く信ぜねばならぬ。因果とは事柄の初めと終と云ふ事で、即ち原因と結果とである、原因があれば結果は必ずある、善因は善果となり悪因は悪果となるものである。然るに信仰のない人は、佛教の因果は信ずるに足らないものとして居る。かくの如き人は、善悪の判断をする事の出来ない人々で、社會に害を及ぼす人である。因果の道理は何人でも疑ふ事は出来ない、例へば米を蒔けば米が出来て、決して豆は出来ないのと同じ道理である。然るに因果の道理を信せない人は只現在のみを見て、因果を説明せんとするからであらうが、佛教には三世に渡つて説明するのである。一切の物が生ずるには、未來に生ずべき因があつて、現在に生じ其因がつきて滅するのであるから過去である、若し現在を中心として云はゞ、人間の一生は現在で、生れざる前は未來で死後は過去である。この因果を三通に説明すると

一に順現業と云ふて、現在に作つた報を現在に受けるのである、善をした爲に賞讃せられ、悪をした爲に罰せられて、罪人となるが如きものにして、何人も知らるゝ道理である、二に順生業である、これは現在に作つた因によつて未來に果を受けるので一生になした事を次の世で受けるのである。現在に善い行をしても現はれず、又悪い事をして罪が現はれず、法律の網をのがれても、因果の道理は決してのがれられないので、次の生に受けねばならぬ。現在善人であるにか、はらず、不運であつて苦しんで居り、又現在では悪人であるが然し運が強くて安樂に生活して居るが如きは、前世の業の爲であるから、疑ふ事は出来ない、これは善人が現在に善をして居るも、過去の方の因が強いから現在の善はかくれて居るが、將來には必ず現はれるのである、又悪人が悪をなすつゝ幸運なのは、前世の善の爲に現在の悪がかくれて、善丈しか見えないのであるが、この現在に作つた因は、未來に必ず受けねばならぬ。只現在のみを見て居るから、この道理が信せられないのである。三に順後業とは現世に作つた因

が、二世も三世も後に現はれるのである。かくの如く三通に説明せらるゝから、すべての因果は完全に説明し得るのである。吾々が生れたのは、何もない處から偶然に生れたものとは思はれない、必ず因があつて現在の生と云ふ果を受けたのである。故に未來も同様である、然るに死後は一切無に歸した如く思ふは斷見と云ふのである、又死して後人間は人間に生れ馬は馬に犬は犬に生れると云ふ風に考へるのは、常見と云ふのである。この斷常の二見は佛教の道理に反對して居る邪見である、故に因果の道理を信じて居る人は、善惡の判斷が出来から惡は決して行はない。然るに斷見常見は人は善惡の標準がないから、時によつて善惡が同一になつて惡を行ふ事がある、因果の道理を信ずると信じないによつて、非常な差が出来て來る、故に因果の道理を深く信じて行くならば、この現在に佛因を作り未來は佛果を證する事が出来る、覺鑊上人は「過去の因を知らんと欲せば現在の果を見よ、又未來の果を知らんと欲せば現在の因を見よ」と云はれて居る。吾々は過去も未來も、只現在の善い行によりて改造せ

らるゝのである、吾々の此世に残すべきものは、只善根の功德あるのみである事を、自覺し信仰して因果の道理を味ふべきである。

十 迷の根本

吾々の本體は眞如と云ひ如來藏と云ふて、眞なり善なり美なる佛の状態であつて、最も尊い最も勝れた有様で、靜かなる事大海の如く、廣い事野原の如く、徳の圓滿せる事満月の如く、萬物を宿す事鏡の如きものであつた、處がこの眞如には、平等であると同時に、又動くと云ふ差別的の性を以て居る。眞如にはこの二方面があるけれども眞如と云ふは平等の方面で云ふので、差別的の性は生滅と云ふて迷と云ふのである、吾々は眞如の實體を忘れた、不覺の無明の一念が動いた爲に、今迄靜かな眞如の水に一點の小波が生じた、これ一切の迷の根本であるから、根本無明と云ふのである。この小波の動く處に差別と云ふ見解が起つて來る、この見解があるから、これに對する

境界が起つて来る、これは眞如に對して差別の執を起したとは云へ、心とか物とか區別の出来ない微妙不可思議の波動であつて、佛によつて初めて知らるゝものである、これを三細と云ふのである。

次に三細の境界が起つたから、智によつてこれは愛すべきもの、これは愛すべからざるものと云ふ判断が起つて来る、これによつて愛すべきものは楽しい、又愛すべからざるものは苦しいと云ふ感が起る、次に楽しいものは善いから取り、苦しいものは惡いから捨てるると云ふ執着の心が起る、次に何々は善い何々は惡いと、名字や言葉によつて區別を生ず、次にこれを實際に行ふによつて業を作る、次にこの業がある爲に、果を受けて苦しまねばならぬ。かくの如きは三細が増長したのを六籠と云ふ、これは前より大きいから、菩薩の位に入れば知らるゝのである、これが爲に、三界六度に迷ふて、至る處を知らないのである。例へば静かな水に微風を生じて、細かな波が正に動かんとして居る、これが小波となる、これを中心として圓を書きつゝ、次第々々に

中心より遠ざかるに隨つて波は大きくなり、四方に波は及んで水面全體が大波となりて、船を破り人畜を害して止る處を知らない有様であるが、この原因は只一點の波が動いた爲である、吾々の不覺の我が如何なる時でも我と云ふものに執着して居る、これが爲に迷を重ねるのである、故に我は迷の根本である、佛敎には無我を盛に説くのは、この迷の小我を捨て、大我の眞如に歸らしめる爲である。これを要するに、迷の根本は眞如を忘れた一念の我である、佛菩薩はこの根本の無明を知るが故に、この無明を轉じて悟を開かれるのである。

十一 三種の菩提心

前に信仰とは、初自己の不安より出發して、最後に安心となり、これが直に又利他の行ひと現はれて来るものであると云ふたが、茲に於て安心の利他的方面を述べよう。信仰安心信心とは佛ありと信ずる心であるから、決定信心でなければならぬ。この心

を開いて三方面から見るのである。

一に勝義の菩提心である、これは善惡に對して、惡は劣とし善は勝とする判斷分別の心であつて、惡はなすべからず、又善は如何なる時、如何なる場合でも行ふべきである、確かに信じて動かない心である、これ眞理の一分を認めたものである。

二に行願の菩提心である、これは自覺すると同時に他人も同様に、悟らしめんとする心にして、人に對して同情心を起すのである、即ち佛の本願力を信ずるが故に、これを行ふのである、これは覺他であつて、六度萬行等の修行をする事である、之れ前の心を一步進めたものである。

三に三昧地の菩提心である、三昧地とは平等であるから、平等の心と云ふ事になる、これは行願の心を廣めたものにして、慈悲と云ふものは人間や動物のみに限らず、山川草木に至る迄及ぶべきものであるから、他人の苦即ち自分の苦でありとして、自他の區別を認めず、故に他人が悟らば自分も悟らずとして、大悲の行をなすので、

覺も行も圓滿した處の心を云ふのである。以上の如く信仰の心に三種ありと云ふもこれは心の發展を示すものにして、信仰の低度によるのである。されば人々によりて勝義の心もあれば、行願の心に住する人もあるが、眞に信仰を得た人はかくの如き三通り心を起すべきものにして、この位に來れば、初め佛に對した信仰が自分の心を信する事になつて、自己が直に大日如來である。梵網經には、二種の心を説いてある。一は孝順心にして向上の心で、親や師等の目上の者に隨ふ心である。二は慈悲心にしてこれは向下の心で目下の者に同情を起す心である、この心は二方面から見ただつて、智と悲とである。前の三種の心も要するにこの二つになるのである、故に信仰の力は智慧の二行も圓滿する事で、自利々他の行となるのであつて、即ち人格を向上せしめるものである。

十二 不二の法門

佛教は澤山の宗旨に分れて居るが、一切衆生を成佛せしめるのが目的である、この成佛の根本は、眞言陀羅尼の秘密教にあり、而してこの秘密の極理は灌頂にある、この灌頂は、古來印度の王様が天子の位を繼ぐ時に行はれた儀式である、即ち日本で云ふなれば、御大典の即位式と同様である。吾々がこの灌頂の儀式によつて直に成佛するので、秘密肝要の秘法である。而して灌とは五部の（佛部、蓮花部、金剛部、寶部、羯磨部）瓶水を注ぐのである。頂とは受者の頭の頂の事であつて、身體の中で頂上が最も尊ひ如く、心は最も尊き故に、頂と云ふのである。即ち佛の智水を吾々の心に注いで、吾々の淨菩提心に佛の大悲を被らしめるのである。この灌頂に三種の別がある一に血縁灌頂と云ふは、佛法の信者は何人でも許されるのであつて、佛と縁を結んで信者となつた印である。

二に學法灌頂とは、一部一尊の法を受け學ぶので、正しく佛弟子となつた印である。

三に傳法灌頂とは、秘密の大法を全部受けて、一切衆生に傳へる事を許される灌頂

である。

この三種の灌頂は、一尺の地を掘れば一尺の水を得、二尺掘れば二尺の水を得、三尺四尺と深く掘れば、掘るに隨つて水も深く得らるゝ如くであるが、成佛には決して異はない、今一般的に血縁灌頂の事を述べん。この血縁灌頂は、如何なる人でも菩提心を起して求めるなれば、入壇を許すのである。先づ灌頂を受ける時に、投花得佛と云ふて、眼を塞ぎ兩手を合せ、其中指の間に花を挟み、之を曼荼羅の畫像の諸佛に向つて投げるので、この花が當つた佛が自己の本尊となるべき因縁があるので、この佛と縁を結ぶのである。かくの如く佛の身口意の三昧に住して、灌頂の道場に入りて、一度曼荼羅を見た功德が無始の重罪を消滅せしめて、清淨なる佛の子と生れ變つた様になるのである。この秘密の灌頂によつて淨菩提心に植えられた功德は永久に滅するものではない。この功德が増長し發展して佛果は開かれるのである。私は己に眞言宗の特色を所々で述べたが、この灌頂こそ根本的特色であつて、不二の法と云はれるので

ある。我弘法大師が身命を捨て、入唐し、慧果和尚から傳へられた八祖相承の不二の法門は、この灌頂の外にない。これを要するに眞言宗の總ての教理經文も、この灌頂の儀式に入る方法を述べたに過ぎないのである。されば眞言宗の特色は、この秘密瑜伽の灌頂を以て極秘とするのであるから、これを不二の法門と云ふのである。大師はこの灌頂によつて大日如來と同體になられて、遍照金剛と申されました。眞言宗の根本たるこの灌頂に入りて、御互に佛縁を結んで即身成佛の位に住して、圓滿なる生活をせられん事を祈ります、これ眞言宗の信者として、得らるべき特色であります。

十三 理論と實行

眞言宗の教は、大日如來の自内證の法門であるから理論上から云ふと、誠に高尚な深い教である。凡夫も佛も同一體にして、決して異なつたものでない、凡夫即佛、即事而眞。當相即道と云ふて、現在の其儘が佛の有様であると説くのである、故にこれを

教理法相と云ふて、宇宙の眞理を説明するものである。處が實際の方から云ふと、吾々は佛であつても、其實行になると凡夫としての行ひしが出来ない、故に修行によつて一步一步佛に近づくのである。これは實習實行であつて、事相と云ふて居る、これは修行に必要な方法を示したものである。眞言宗の教は、この二方面によつて完全になるのである。若し理論のみであつたならば、哲學と何の選ぶ處もない、又實行のみであつたならば、普通の道徳となるであらう。この二は花と實との如く離すべからざるものである、眞言宗は理論の上から云へば、一切世界の事物草木に至る迄、成佛を説き、各宗も眞言宗の中に含まれて居る高尚なる教であるが、實行の方面からは實に低いのであつて、大師は世間的に河や池を掘り『いろは』歌を作り、施藥施病の事を實際に現はされて居る、大師が如何に眞言の深い教を、此世に實行せられたかを窺ふに足るであらう。大師がこの世界を、直に極樂世界と化せんと努力せられたが、知られるこれを要するに、理論は哲學以上にあり、實行は道徳と一致して、眞言の教を完全に

現はすものである。さればこの理論と實行とを吾々の身の上に現はした處は、即身成佛と云ふべきものにして、眞言の教を自己が得たのであつて、自分のなす事行ふ事これ皆佛業となるのである。故にこの二方法によつて、完全圓滿なる人格となるのである、さればこの二を併行して行く様に、努力せねばなりません。

十四 悟の修行

修行と云ふ事は決して困難の事ではない、吾々の日常になす事が皆修行であつて、佛の道に契つて居る事である、心や身體の働きが眞實で、誠の心から現はれた行を修行と云ふのであるが、吾々はなかくこの誠の心を以て、貫ぬく事はむづかしい。吾々の現在には根本無明の爲に、自己の眞價を現はす事が出来ないのであると、主張して居る宗旨もある、これ尤な事であらう。吾々が自己の不完全を知つた時が、悟に入る第一歩である。これ修行の起る初めてである。人々によつて修行も一通には行かぬ、宿世

の因縁の勝れた人は、不覺の根本無明を直に斷じて、眞如本覺の都に歸るであらうがこれに反して一般の人々は、一歩々と佛の道に近よる様に勤めねばならぬ、吾々が現在の不完全なものであるのは、これ前世の因がある爲である、この因を滅しさへすれば、果は決して起らないのである。即ち波を滅して水とする様なものである、眞如に二方面あると云ふ事を前に述べた通り、眞如の現はれんとしての吾々の心には、平等であつて常住なる水の方面がある、これを心の體と云ふので、佛性とも本性とも云ふべきものであつて、小眞如である、如何なる悪人にも一切の人々に通じて存在して居る。これを世間では良心と云ふて居る、修行はこの良心を發達せしめる事である。又吾々の心の一面には、差別的であつて浮動する波の方面がある、これを心の相と云ふので、煩惱とも無明とも云ふべきものであつて迷の心である、故に修行はこの迷の心を滅する事である、されば修行には二方面の力がある、善の心は増長せしめ、惡の心は滅するのである、吾々の心にはこの二作用が常に働いて居る、佛はこの心の體に

歸つて、水としての生活をして居る、凡夫は心の相に迷つて、波としての生活である。この水と波との間に澤山の階級がある。修行の多い少ないによつて分かれるのである。茲に注意して置かねばならぬ事は、吾々は佛であると同時に説き、今は吾々は凡夫である。と云ふのは、吾々の心は已に述べし様に、二方面の作用があるからである、今は修行を明す處であるから、凡夫と云ふので、若し佛だと云ふなれば、修行もなにも入らなくなる、處が淨土宗の如く、吾々は凡夫であつて、とても自己の力で佛になれないと主張する宗旨もある。かくの如く見るは、只一面の見方であつて、人間の價値を認めないものである。吾が眞言密教は凡夫としての我と、佛としての我とありとするので、凡夫としては小我であり、佛としては大我であつて、吾々の心の二方面の働きがそれである。これを要するに、佛と我は一體であつて、佛は大我が表となり小我はかくれて居る。凡夫は小我が表となり、大我がかくれて居るのである。かくの如く吾々の心は價値ありとする處に、眞言宗の特色が現はれるのである。吾々の心は金剛の

寶玉ではあるが、曇があり垢がある處を凡夫と云ふのであつて、他宗の如く、石や瓦の如く價値なきものとは云はないのである。さればこの垢を除いて光を現はすのが、修行の意味である。この垢を除く處は、心の相の波を滅するので、寶玉が光を發するは、心の體たる良心の發達となるのである。この修行には二方面の作用があるけれども、決して別々ではなくて、垢を除く處に光は現はれるのである。これ眞言宗に凡夫即ち佛と云ふは、この處であつて、修行の外に佛はない、修行の處直に佛である。されば吾々が日常なす事も、良心を發達せしめる方法や惡を止る方法であれば、これ修行と云ふべきであつて、これを次第々々に向上せしめて行く處に佛の道は開けて、悟の境内に入る事が出来るのである。これを要するに、修行とは正しき道を進む事であつて、誠の心を以て佛の教を實行するにある、茲に於て吾々の本體たる、眞如の都に歸る事が出来るのである、これ吾々の本務であり目的である。故に修行と悟とは同時である、これ修行が直に本有と云は

れて、吾々の佛徳を表すのであるから、表徳門の教と云ふて居る、修行の最後は悟てあつて區別がつかなくなる、これ修行即ち目的である、この處に至つて初めて修行の眞意義が現はれるのである。

十五 念珠と合掌

念珠とは數珠の事にして、佛を禮拜する時に用ゆるものであつて、佛教では一般に吾々の迷の心を拂ふものとして居る、故に煩惱に例へる、煩惱を大別して百八とするから、數珠の玉も百八あり、又五十四の煩惱として、五十四粒の念珠を用ひて居るが、この數珠は吾々の煩惱を現はしたものととして、手の中ですり砕くのである、故に煩惱退治の意味となる、眞言宗にもこの意味を一應用ひますが、この外に深い意味があるのである、それはこの煩惱が、直に佛の徳であつて、百八の三昧であるとするので、百八煩惱が百八の功德であると云ふのであるから、これを表徳の義と申して眞言宗の

特色である、これを要するに、因果を同時に見るのであるから、二義がある事を知らねばならん、猶兩方の親玉は、觀音の因、彌陀の果を示して居るとし、金剛樹の玉は祈念の時に用ひ、菩提樹の玉は廻向によろしいと云ふ風に、委しく説かれてあるが、今は略す事にして、數珠は百八煩惱が直に百八の功德を表して居るものであると云ふ深い義を心得てもらへばよいのである。この意味から因即ち果であるから、吾々の迷を念珠の功德によつて、煩惱は拂ふ處に果があるのであるから、念珠は智慧の光明を現はすものである。念珠はかくの如き功德があるから、是非持たねばならぬ、又一面には自己の信仰を示すものである。次に合掌とは手を合す事て佛になる因行をなすもので、蓮花の花の蕾が開かんとする形であるから、吾々の心に佛の功德を現はす第一歩である、兩手を合したの、吾々と佛と一致した處である、眞言宗では右手を佛に配し、左手を吾々衆生に配してある、故に合掌は吾々と佛と全く差別のない境界で、一體となつたので、即ち即身成佛

とも云はれるのである、この手を合す處に、口には眞言が唱へられ、心には佛の相を思ひ出すものである。かくの如くする時には、吾々の忘念の迷は、知らず知らずの内
に拂はれて、清淨の身口意が現はれて來るのである。かくの如く合掌に深い意味を見
るのは、眞言宗の特色である、この兩手は又理智に配して、佛を智徳とし吾々を理徳
とするので、理智和合一體の處は、即ち兩部曼荼羅であるから、吾々の他に佛はない
と云ふ事が、明かに知られるであらう、故に吾々の身體に佛徳を現してなす事する事
が、皆佛作佛業となつて來る、故に手を合す事が一切の善根の初めである、故にこの
印を以て印母としてある、母より子が生ずるが如く、萬善の源であり根本である、さ
れば念珠と合掌とは、修行に入る方法である。

十六 塔婆の意義

塔婆は卒塔婆と云ふて、佛菩薩や其他年回や年忌の時に、供養する爲に用ひられて居

る。この塔婆には眞言宗獨特の深い意味が含んで居るので、僅か一本の塔婆で、宇宙
の原理を示して居ると同時に、供養の意味を現はして居る。元來塔婆は五大の形と云
ふて、地水火風空の形を示したもので、地は方形、水は圓形、火は三角、風は半月、
空は團形である、この五形が集つて一本の塔婆となつたのである、この五大は物質的
の方面を五形に示したのである。この外に識を加へて六大と云ふ、この識は即ち精神
又は心にして、形として現はす事が出来ないが、この五大五形の中に、遍く存在して
居るから、潜在して居るので、塔婆は形から云へば、五形であるが、内容から云へば
六大である、これ即ち大日如來の三昧形である、大日如來の五智を表示して、五形と
したのである、故に塔婆は一切諸佛の形を示したものである、五大は地水火風空にし
て、五形は方圓三角半月圓形である、この五大の色は白赤黄青黒である、諸色も
この五色の變化であるから、要する處この五色の外にないのである、故に五色を以て
宇宙を盡して居る、五大にて宇宙世界の原理の體を現はし、形は五形にて表はし、色

は五色にて示して居る。されば塔婆が現はれて佛となり、衆生となり、一切萬物となつたのである、即ち一切世界の根本は塔婆であるとするのである。さればこの塔婆は兩部曼荼羅を表はして、塔婆の表は胎藏の理を示し、裏は金剛界の智を示して居る。又四角の塔婆は、四曼の義を表して居る、又六角の塔婆は六道を示して居る、又五輪塔多寶塔七重の塔十三重の塔は、何れも深い義が含んで居る、この深い義を含んで居る塔婆を建立して供養する事は、非常な功德がある、この塔婆を川邊に流す事によつて、魚類は成佛し、又山や道の端に立てる事によりて、畜生等に廻向して、成佛の因を作る、又墓所に立て、祖先を供養する等、皆不可思議の功德がある。これを要するに、塔婆は宇宙の根本たる原理を表したもにして、これ即ち大日如來の形を表して居るのであるからこれを供養する事は、成佛の原因を作り、又死者や亡者はこの功德によりて、佛縁を結ぶのである、されば塔婆や經木又は塔を立て、佛を供養せられたならば、自利々他の功德を圓滿する事が出来るのである。

十七 供養の意義

供養とは自己の徳を磨く爲に、事物を佛に供へる事である、而して眞言宗にはこれを二つに分ける、一に理の供養と云ふて、經を讀み眞言を唱へ、又合掌したり印を結んだりして、佛を供養する事であつて、これ等の行ひは、眞理と一致するものであるから理供養と云ふ。

二に事供養と云ふは、物を佛に供へる事である、香を供養するのは、徳を世界に廣めんとする意で、香は虚空に満ちる義があるから、又花を供へるは佛に敬愛の心を起す意味で、花には誰でも愛嬌の心を起す義があるから、又燈明を供へるは、煩惱の迷の闇を拂ふ爲で、光には闇を轉じて光明の智慧を現す義があるから、又飯食を供へるは心を安靜に持つ爲で、食物を得たら心が安樂になるから、又水を供へるは、心を清浄にする爲で、水に清浄の義がある、其他百味の飯食を佛に供養するのは、廣大の功

徳利益がある。この供養の意味は佛なり先祖なりに自己の至誠心を現す爲であつて、經には孝順心と云ふて居るから、吾々の赤心からの現れてあるから、佛の爲である、然に供養の結果佛や先祖の爲と同時に、自分の功德を積む事になるのである、佛の教を信するものは、この供養をせねばならぬ、故に佛は六度萬行と云ふてある、この六度萬行とは、上に述べた香花燈明飯食等の供養に外ならないのである。かくの如く香花燈明等の一寸した供養が密教から云へば、實に深い意味のある供養となり、これが直に佛教となるのであるから、大師は世間の淺い名は、直に眞言の大日如來の名となると示されて居ります、これ眞言宗の特色であります。故に一般の人は、經や眞言を唱へ香花供養して理事の二供養を圓滿する様に、毎日怠らず供養せられん事を勧め置きます。一般の人として佛に近づくには、この供養によるのが一番近道である。この供養の義は向上的の方法であつて、向下的となれば施となるのである、この施にも法施と財施の二義がある、これを要するに、供養は六度萬行で萬善の根本精神である。

十八 眞言と念佛

淨土宗は念佛を本として開いた宗旨であるから、念佛宗と稱して居る、然るに眞言宗は陀羅尼即ち眞言を本として開いた宗旨である故に、眞言宗と稱して居る、念佛とは彌陀の四十八願の中の總體たる、念佛の本願によつて六字の名號を唱へて、往生すると説くので、此六字の名號の中に、一切の義を持つて居るとするのである、又日蓮宗も多少の差はあるけれども、七字の題目の念佛である、この二宗は念佛と念經との差であるが、經は佛によつて説かれたのであるから、念佛に歸するのである、何宗でも佛寶僧の三寶を歸依の對照とするのであるが、歸する處は佛にある、故に三寶一體と云ふのである、この念佛の一を擇んだは何故かと云ふに、身口意の三業の中で、口が尤も易いからである、身で行ふよりも口で云ふ事は易い「云ふは易くして行ふは難し」として居る、この意味から云ふと、禪宗の如き實行主義は、一般には適しないかも知

れない、然し云ふ丈では眞の價値はない、云ふ事は行ふ事てなければならぬ。次に眞言とは言語である、言葉であるから、口で唱ふべきものである、佛の眞實の言葉であるから、この眞言を唱へるものは、佛でなければならぬ、眞言とは佛の名號である、この邊から云へば、念佛も眞言も異なつた事はない、然し念佛と眞言とは功德が異なつて居るのである、念佛は只口に唱へるのが主となつて居る、然るに眞言には身口意の三業が含まれて居るのである、眞言を唱へるは口業である、身體の動作として手を合すは身業である、又意には佛の相を感じ佛の徳を思ひ浮べるが如きは、意業である、この眞言を唱へる時に、他の二業は附いて離れないから、これを三密相應すと云ふのである、眞言の功德によりて三業は三密となりて佛の働きとなるのであるから三密と云ふのである、故に眞言とは口密に名けたのであるが、他の身意の二が隠れて居るのであるから、三秘密と云ふ義がある、これを略して三密と云ふのである、然るに念佛には口業のみでも念佛と云はれるのである、故に眞言は總體であつて、深く廣

い念佛は別體一部分であつて、狭く淺いのである、經に太陽の光明と星の光の如しと説かれてあるから、一應かくの如き差別はあるが、眞言門に入つたならば、念佛も眞言に外ならない、故に念佛も往生成佛の因として説かれてある、これを要するに、念佛は眞言の一部を示したものであつて、眞言は全體の名號であるから、念佛を唱へる事は眞言に入る順序であるとせられて、念佛を進められて居る、然しこの念佛と云ふのは密教の念佛であつて淨土宗に云ふ處の、彌陀一佛に限つた念佛でない事を心得てもらひたいのである。念佛と云へば、淨土宗に限つた様に考へる人が多いが、淨土宗は念佛爲本とするものにして、すべての宗教は皆念佛を説くのである、一應淨土宗の念佛に對して淺深ありと述べましたが、秘密念佛と眞言とは決して淺深はないので、念佛が眞言であり、眞言が念佛である、大師は眞言は不思議なり唱へたら、無明煩惱を除く、又眞言の一字に於てさへ千萬の義理が含まれて居るから、陀羅尼の功德は押し知るべしと示されてある、この眞言の意味を廣めて云ふと、世界のすべての言語や

音聲は皆眞言である、故に菩薩と云ふ人は風の音を聞いて悟るのであるから、風の音も眞言であります、これは例であつて、今は吾々を主として、佛の眞實の言を以て眞言とするのであります。

十九 往生と成佛

往生と成佛と云ふ事を説明すると、往生とは主として、淨土門に云ふ處であつて、往生とは現世に於て念佛して其功德によつて、死後未來に阿彌陀佛の極樂に生ずる事を意味するものである、然るに眞言宗の往生と云ふは、只未來に限つた事はない、現在に於いて吾々の煩惱の迷を破したならば、悟の覺智が生じます、これを往生と云ふのであるが、主として未來を云ふ義であります、本來は眞言宗には、往生と云はずして成佛と云ひます、成佛と云ふ事は、何れの宗旨にも説きますが、眞言宗の如く現世に於て即身成佛を説く宗旨は他にはありません。天臺禪宗の如きは、即心成佛にして心の

成佛である、故に即身成佛は眞言宗の特色であります。

されば大師はこの即身成佛を、三つに分けて説かれて居る。

一に理具の成佛である、吾々凡夫は迷の故に、人の眞の價をかくして居るので、身體の中には無限の寶がある、この寶があるから、この身體が佛である、故にこの肉身を捨てゝは佛になれないと説かれてある、他宗ではこの身體は價値なきもので、迷の本となるものとするに、我宗では悟の本となると云ふ處に異りがある、人間はこの肉體に無限の價がある事を知らねばならぬ、故に非常な時には、不思議な力を現はす事がある、かくの如く肉體を寶と見て行く處に、密教の意味がある。

二に加持の成佛である、吾々の肉體には佛の徳が備つて居るが、これを常に現はす事が出来ない、これを現はすには如來の大悲の力によらねばならぬ、我が肉體を佛の力によつて淨化する事であるから、肉體をして佛の行と同一にする事である、即ち佛の行をして一步步佛に近づく事である、玉を磨く如く身體から佛の光を放つ事である

故に身を修養する事によつて、成佛と云はれるのである。
 三に顯得の成佛である、これは身心共に修行の結果、完全なる人格を顯し得た處である、されば人間の目的はこの處に來つて、初めて達せられたものである。
 かくの如く三通りに説明したが、この三は全く別々ではなくして、初と中と終とである、これは身體に佛の徳の現はれに、多少あるによつて名けた迄である、而してかくの如き即身成佛が、實際に出来るかどうかと疑ふ人があるだらうが、決して疑に足らん、大師はこの三種の成佛を得た人である、大師が五十六億七千萬歳の後に彌勒菩薩と共に世に現はれて、救濟せんと誓願せられ、又高野山の奥の院に入定せられ、又京都の清涼殿で八宗論の時に、身より光明を放たれしが如きは、この三種の成佛を示されたものである。されば吾々は本來佛であつて、心も身體も佛徳を現はすべきであるに、現はし得ないのは迷の爲であるから、この迷を拂ふ爲に、修行せられたならば、現世に於て成佛が出来るのである、故に眞言宗は、現世に即身成佛が本意であるが、

又未來往生も差支ないのである、往生とは佛の大悲の力によつて未來に極樂に生ずるのであつて、成佛は現在に身體が佛徳を現はすのである、この成佛の中には、未來往生の義も含まれて居ります、大師が彌勒の下生を誓はれたのは、これ未來往生の義である、されば往生は一部の爲に説かれしものにして、現世成佛は全體の爲の教であるから、淺深の區別はあるが、往生は成佛の中に統一せらるゝものにして、往生の極意は即身成佛になるのであります、故に一應は區別をしますが、往生して見れば成佛である、眞言宗からは往生も成佛も同じ事であるから、淺深の思をしてはなりません。成佛は吾々の理想である、さればこの理想に向つて努力すること、吾々の努むべき本務である。

二十 淨土極樂

淨土とか極樂とか云ふと、遠方にある様に思はれる、淨土宗では西方十萬億土に極樂

を求めから、この世の外にあるとするのである、又禪宗は以心傳心とするから、淨土と云ふも心の外に求めないのである、これは禪宗に限つた事はない、すべての宗教は心を以て淨土として、心の外に極樂はないとするのである、然し吾々人間のこの心が淨土であり極樂であるとは考へられない、故に吾々の本體たる大日如來を以て、佛としての住せる處を淨土とするのである、淨土宗は彌陀を中心として、西方極樂を説くのである、然るに眞言宗には、大日を中心として十方淨土を説くのである。中央大日の淨土を密嚴淨土とし、東方に藥師の淨土、南方に寶性佛の淨土、西方に彌陀の淨土、北方に釋迦の淨土、天上に彌勒の淨土、其他無數に淨土があつて、有縁の淨土に至る事が出来るのである、かくの如き淨土を十方淨土と云ひまして、各々の佛の本誓によつて立てた淨土であります、これ等の淨土も、要するに大日如來の密嚴佛國土の外にないのである、故に密嚴淨土は極樂の全體にして、十方淨土は一部の淨土であります、故に東西南北の淨土も、中央大日の淨土に歸するのである。されば有縁の西

方なり北方なりの淨土を願つても、少しも差支はないのである、故に淨土宗の如く西方の一方に限つたものでない、否淨土宗でも本意は中央とするのであるが、方便として西方と説くのであるから、淨土は西方に限らないのである、眞言宗に西方に彌陀の淨土ありとするは、觀音是因であつて彌陀は果佛である、西方は四季には秋とする萬物秋に收穫す、又日没の方なるが故に、物の終極であるから、彌陀果佛に相應する、故に西方を彌陀の淨土とするのであるが、中央大日の淨土を中心として、西方としたので十萬億の淨土ではないから、淨土宗の淨土とは異なつて居る事を知らねばならぬされど大日の淨土は十方淨土であるから、淨土宗の彌陀の極樂も、大日の淨土の外にないのである、道範師は秘密念佛集に西方十萬億土を解釋して云く、西方は心内の淨土である、十萬億土とは、人の心に付て云ふので、惡人は遠方に極樂がある、惡人の行は佛の行に背いて居るが、善根の人は佛の行と一致して居るから、十萬億土は心内にあるから、近い殊に億の字は人の意と書てある、故に人の心の善惡によるので

ある、然るに浄土宗に十萬億土と立てるのは、極悪人を主として立てたのである、故に眞言宗に彌陀を西方に配するのは、大に意味が異なつて居る事を知らねばならぬ。而して眞言宗の浄土は、大日如來を中心としての浄土である、十方浄土として一方に限らず、世界全體が浄土とするのであるから、此土即ち浄土である、この心即ち極樂であるとするのであるから、現世に於て極樂を求め浄土を作る事が出来るのである、故に此の世を捨て他に極樂を求めないのである、これが眞言宗の特色である、されば吾々は毎日努力して、此世に極樂浄土を作り、歡喜に満ちた生活を送らうてはありませんか、この極樂浄土の生活は、心身を一とした完全なる人格的圓滿の生活によつて極樂の意義が現はれて來るのである、故に浄土と極樂とは人生に於ける終極の目的地であり理想境である。

廿一 心佛衆生

日本の佛教は八宗九宗十二宗等と稱して居るが、これ等の宗教も、心佛衆生の三方面を説けるものであると云ふ事が出来る。

初に心とは、佛教では八つの心があるとするのであるが、其根本の心は第八識であつて、阿頼耶識と云ふて居る、この阿頼耶識は一切萬有の根本であつて、この識の中に善惡一切の種子を含んで居るのである、この善心が活動すれば、佛徳を現はし、又惡心が活動すれば衆生となるのである、この善心の方を主張して、この阿頼耶識の根源を徹底せしめるものは、實に禪宗の特色とする處である。

次に佛とは、佛教で三通に分けて説明するので、一に應身佛である、これは吾々と同じく出現して修行して悟りを開くので、釋迦佛の如き人を云ふのである、二に報身とは凡夫では知れないが、菩薩の位にある人々はこの佛を感じるのである。三は法身佛であるがこれは眞如に名けたものであつて、眞如の理體を佛と云ふのであるが、眞言宗にはこの眞如を智的に見て大日如來として、法身説法を主張するので、眞言宗の特

色である、かくの如き三身も法身佛の本體の佛に歸するのである、故に此世は佛の現はれであると思われやう、この佛の平等の方は心となり差別の方は衆生となるのである。

後に衆生とは即ち凡夫である、この凡夫とは眞理を知らざる迷妄に名けたものであるが、この衆生にも善惡の二方面がある、善の方は佛性であり、惡の方は凡夫として、迷つて居る方である、この中凡夫と云ふは、迷の方を以て凡夫と名けたものであるこの凡夫の凡夫たる所以を主張するものは、淨土宗の外にあるまい、淨土宗は佛と衆生とは、全く別物であるから、彌陀の本願によつて救はれるので、凡夫の方では決して成佛も往生も出来ないと思つてあつて、吾々衆生と云ふ事を徹底的に主張するものであるから、これ淨土宗の特色である。

かくの如く心佛衆生の三法は、決して別々のものでない事は、已に説ける處によつて知られるであらう。故に佛教にはこの三は一體であると思ふて居る、故にこの中の一を云ふ時、他の二は含まれて居るのである、智情意の三が一人格を現はせる如く、この三法は一體であつて能く佛敎の理を現はせるものである。故に如何に澤山の宗敎ありと云へども、心佛衆生の三法に統一せらるべきものである、されば日本佛敎を代表せるものは、禪宗と眞言宗と淨土宗との三宗であらう。

廿二 智情意と佛敎

釋迦が入滅するや、釋迦の人格を現はさんが爲に、或者は智を以てし、或者は情を以てし、或者は意を以て見た、こゝに於て天台華嚴等の宗は、智的に釋迦を見るのである。又淨土宗の如きは、彌陀本願に歸して情的に見るのである、禪宗の如き宗は見性成佛を説いて、佛を意志的に見るのである。これは釋迦の人格の三方面を異なつた方から見るからであつて、元來釋迦の一人格を示す一方法に過ぎぬ。かくの如き見方は眞の釋迦を示せるものでない、これを完全に然も徹底的に説けるものは密敎である。

密教に來つて佛の全人格を、完全にとらへて説明し得るのである。大師が各宗を排斥せずして、これ等の宗教は密教の一部を示せる宗教だと主張せられたのは、大師が智情意の三を統一して、全人格が現はれる如く、各宗を統一して密教の本旨も特色も現はれるのである。大師の教が如何に完全で、宏大なる教であるか、知られるであらう然して心の本體を求めんとせるものは禪宗であり、又物の本體を求めんとせるものは淨土宗である、故にこの二宗は全く反對の立脚地の上に教を弘めんとせるものであるこの二極端を一致せしめんと主張せるものは眞言宗である、故に眞言宗の兩部曼荼羅の處に述べし如く、心物の二を主張する事によつて、密教の特色があるので、他の二宗にも特色があらはれるであらう、而して、眞言密教こそ完全なる智情意圓滿の代表的宗教である。(完)

實生活を
主としたる
大師教の
特徴終

大正十年九月廿五日印刷
大正十年九月廿八日發行

實生活を主としたる大師教の特徴終
定價金三十五錢也

不許
複製

編者 高橋有健
發行者 伊豆宥法
印刷人 堀内信次
印刷所 東京市牛込區若宮町三五
東京市牛込區若宮町三五
國譯密教刊行會印刷所

發行所 東京市牛込區若宮町三五
電話番町二五二三
國譯密教刊行會

大師教の特徴

密教に來つて佛の全人格を、完全にとらへて説明し得るのである。大師が各宗を排斥せずして、これ等の宗教は密教の一部を示せる宗教だと主張せられたのは、大師が智情意の三を統一して、全人格が現はれる如く、各宗を統一して密教の本旨も特色も現はれるのである。大師の教が如何に完全で、宏大なる教であるか、知られるであらう然して心の本體を求めんとせるものは禪宗であり、又物の本體を求めんとせるものは淨土宗である、故にこの二宗は全く反對の立脚地の上に教を弘めんとせるものであるこの二極端を一致せしめんと主張せるものは眞言宗である、故に眞言宗の兩部曼荼羅の處に述べし如く、心物の二を主張する事によつて、密教の特色があるので、他の二宗にも特色があらはれるであらう、而して、眞言密教こそ完全なる智情意圓滿の代表的宗教である。(完)

實生活を主としたる 大師教の特徴終

大正十年九月廿五日印刷
大正十年九月廿八日發行

實生活を主としたる大師教の特徴奥付
定價金三十五錢也

不許
複製

編者 高橋有健
發行者 伊豆宥法
印刷人 堀内信次
印刷所 東京市牛込區若宮町三五
東京市芝區愛宕下町三ノ一
國譯密教刊行會印刷所

發行所 東京市牛込區若宮町三五
振替東京五〇一八七 電話番町二五二三
國譯密教刊行會

393
247

終

